

金曜 ライフ・楽しむ

シニア世代を応援するページです

わたし色

生活情報誌「悠悠と。」

編集長・真鍋康利さん



特殊詐欺 ひとつとと思わないで

床屋さんで聞いた話です。ある客が銭湯に行った時、「財布がない」と大声をあげる人がいた。被害者は脱衣場にある鍵のかかるロッカーを使わず、財布をスポンのポケットに入れたまま脱衣かごに入れていた。すぐ警察が来て、その場にいた全員が足止め。客も子連れにもかかわらず、どこで何をしていたかなど細かく聞かれた。

この客と床屋のオヤジの結論は「盗人がもちろん悪いが、ロッカーを使わないというのも間違い。えらい迷惑だ」だったそうです。

この話を聞きながら、今では特殊詐欺と言っているのが「オレオレ詐欺」を思い出しました。新聞やテレビで報道され、銀行には注意喚起のポスターが貼ってあります。それでも被害はなくなりません。老後の資金を根こそぎなくしたなど聞くと心が痛み、激しい怒りを覚えます。

これほど話題になっているのになぜだまされるのでしょうか。四つの「不思議」について考えてみました。

まず自由になる大金がある不思議。自分を顧みるとすべしに動かせるお金などなく、まず家人や友人らに連絡を取ります。その中で必ず、誰かが

「おかしい」と気づかせてくれるはず。

次に子や孫を信用できない不思議。いつもは「うちの子どもに限って…」と思うのに、「使い込んだ」「痴漢でつかまった」などというハレソチな理由をやみくもに信じ込むとは。「そんな馬鹿なことをするわけがない」と電話に一喝したいものです。

第3は風邪気味や泣き声だとしても、我が子の声じゃないことがわからない不思議。日頃の交流不足が原因でしょうか。第4は注意されても止まらない不思議。親切な振りをしてだますという上級技だと困りますが…。

北海道出身の作家鳴海章の

小説「刑事道」に、特殊詐欺グループの訓練の様子が出てきます。軽いノリで仲間入りした若者が、金と力で縛り付けられ、言うことを聞かないと自分の身が危ないという状況に追い込まれ、必死にだましのテクニックを磨きます。だましのプロが日夜研鑽を積み、登場人物を増やすなど巧妙になっているのですから、太刀打ちするのは至難です。

私だけは大丈夫と思っていませんか。助かった人もたくさんいるのです。「もつとしっかりせんかい！」と言いたい気持ちです。ひとつとと思わず、決してだまされない強い意思が必要なのです。

10月は全国銀行協会の「振り込め詐欺等撲滅強化推進期間」です。15日は年金支給日。次に狙われるのはあなたかもしれませんよ。